
リップ・ケーション

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リップ・ケーション

【Zコード】

N2129D

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

生まれながら病気を体に抱えてるミサコ、彼女と生まれたときからの付き合いのユミ、幼なじみの男の子と女の子のちょっと変わった恋愛の物語。

「いつかわからなくて、なりゆきにまかせてみた。あたしは笑顔になつた、すっごくほこんでた。顔のきんにぐが全部ゆるくなつたみたいに、にこつてにやけた。そんなあたしを見て、コツくんもにこつてわらつた。コツくんの笑つた顔がまぶしかつた、あたしのだいすきな表情。いつもあたしにパワーをくれる、あたしを何倍にも、何十倍にもしてくれる。

風がひゅうつてふいて、コツくんの髪がほのかにゆれた。あたしの髪をゆらして、ほつべをなでて、パジャマの右つかわをひらひらさせていった。窓を開けていたから、こんなにちはつてあたしの部屋にはいつてきたみたい。だめよ、おじやません。今はあたしとゴツくんの大切なじかんなんだから、横からわりこまないで。ふくれそうになつてると、「ねえ、ミーちゃん」つてよばれた。あたしはまたフフつてほほえんで、「なあに?」つていつた。

「今どおりひつた風ひでか、ざいにひ行ひたとおもひへ。」

をした。

その壁に当たつて、われぢやつたんぢやない、つてあたしはい
たえた。

「違うよ、そこの壁をスルリってとおりぬけていくんだ」「どこまでも、どこまでも、あの風はとんどくんだよ」「へえ、すごいんだね。

そうなんだって感心しちゃった、ゴックくんらしいなっておもった。「スルリてとおれるなんて、とつめいにんげんみたいだね」「そりゃ、だつて風つてとつめいだろ?」

ホントだ、つてあたしは驚いた。すこしごめめると、ゴックくんはそんなことないよって歯をみせる。ゴックくんは物知りさんだ、おかげで あたしがおばかさんみたいじゃん。

ゴックくんが帰るから、げんかんまで見送りにいく。「じゃあね」つてゴックくんが言つて、

「うん、また明日ね」つてあたしが皿づ。こつものあたしたちのバイバイのしかた、右手を小さくふつておよねならす。そこそこ笑顔つてきめてるの、そしたらゴックくんにまたしの笑つた顔が記憶されるから。もし、あとでゴックくんがあたしたことおもいだすとき、あたしの笑つた顔が出てくるよつ。

ドアがしまるど、鍵をかけて、またつ壁のあたしの部屋にむぐる。くちびるについた色

をおとしながら、ゴックくんの温度をおもこだす。畠田はグレープにしようつてきめながら、

あいてた窓をキュつてしめた。ベッドによじたわったひ、わつきのゴックくんとの会話をふりかえつてく。きょうのあたしのはんせいかい、なんかぐマしてないかなつておもいかえしていく。だいじょうぶ、きょうのあたしはハナマルさん。

雨がざわざわと降っていた、朝からこっぱい降っていた。朝もざわざわ、血もあざあ、夜もざわあざわ。おれりで、そんなに泣かないで。泣きたいのは、あたしもおんなじだよ。雨が降つてゐる日はね、コッシくんがあんまりきてくれないの。だから、あたしにこじわるしないで。懸してことがあつたんない、あたしがなぐさめてあげるから。

今日はあせりあひるから、明日はおひれまも来てよね。日光をあせりあせりあぶしくわせしね。この日はコッシくんはやつぱり来なかつた、せみしいなあ。

あたしん家とコッシくん家は、おとなりやん。左の赤つぽこ屋根の家があたしん家、右の青つぽい屋根の家がコッシくん家。春になつたら庭にタンポポがたくのがあたしん家、その後にコリがさくのがコッシくん家。物置きにこらないう洗濯機があるのがあたしん家、ベッヂの犬小屋になつてゐるのがコッシくん家。あたしが住んでゐのがあたしん家、コッシくんがいるのがコッシくん家。

あたしとコッシくんはおんなじ年、生まれたのもおんなじ年。コッシくんが先にうまれて、あたしがちょっと後にうまれた。それから、ずっとおとなりやん。遊ぶときもこつしょで、学校いくときもこつしょで、あたしはよへコッシくんのとなりにいた。

やいはこつともおひ

つべ、ゴシくんのとなりにこるとホシとある。ゴシくんもこいつもあたしをとなりにこわせてくれる、こっしょこっててくれる。ありがとね、ゴシくん。言葉にほじてないけど、心の中でもいにち書つてるよ。

今日はゴシくんが来ててくれた、おひさまがまぶしかった。おさんも、昨日とちがつて元気いっぽい。朝起きると、カーテンをあけた、窓もあけた。おそらさんのがきれいだつた、空気がとってもおこしかつた。お皿の3時ぐらこにパンポンがなつて、おかあさんがゴシくんよつて言つた。あたしははあいつて答えて、かいだんを降りて。あたしつたひ、もう顔がわらつてゐる。まだ、ゴシくんはあつてもないの。ひよつともまてないのね、しんまうのダメな子。せめてゴシくんにあつてからこなせこ、「はあい」。ゴシくんはげんかんで、くつを取つて、もうスリッパをはいた。うちのスリッパはお金持ちの家のふかふかしたのじゃなくて、歩こてるヒペヒペココつてゐるの。あんなふかふかのはいてみたいけど、このペコペコにこつてゐる音はあたしのお皿に入り。ゴシくん家のスリッパもおんなじなの、いっしょだね、なかよしさんだね。ゴシくんはあたしの部屋にはいつたり、こつもカーペットのところにすわる。ベッドにすわって、あたしがそここすわるからつて言つて、ゴシくんはやつしなご。あたしをベッドにすわらせる、こりが

んごじゅうのいいところにいたせてくれる。

コッシくんとトランプした、ババぬきとか、神経衰弱とか。15回たたかって、あたしが5回かつた。でも、トランプって運だよね。あたしが5回しか勝てないってふうへい、運だったら1~2のかぐりつじやないの?あたしがもうひとつと勝つてもいいんじゃないの?あたしが口をつんとさせてたら、コッシくんがトランプやめようつて言った。あたしがすねてたから気をつかってくれたんだね、『めんね。コッシくんのせいじゃないつてわかつてるよ、たまたまだつて。朝テレビみたとき、占いであたし11番だつたもん。今日はいやな日だつておもつてたから、大丈夫。いやなのがトランプでよかつた、だれかがケガとかしないでよかつたよ。

コッシくんが帰るつて言つた、時計をみたらもう6時になつてた。時間つてはやいな、うれしいときつて特にねやうつて言つてたし。あれつ、じゃああたしは今うれしいんだね。コッシくんとこうやつていられる時間がうれしいんだね、あたし。コッシくんとこる時間がうれしいつてわかつてうれしかつた、Hへく。あたしの心がわらつてた、ウキウキなままで机のおおきな引き出しをあけた。ビニにしようかなつてえらんでたら、アつておもいだし。そういうえば昨日、グレープにしようつてきめてたんだ。忘れてた、昨日のあたし、『

めんなれこ。グレープの口紅をとりだして、あたしのくちびるを周させる。ぬつたら、

上と下のくちびるをぴつたとじさせて離すの、ンマシ、ンマシ、つて。おかあさんがそうしてたから、あたしもやつしめる。口紅をくちびるにぬるといや、そうしないといけないんだつて。

あたしのくちびるに色と味がたれれた、グレープの色と味。あたし、グレープすきだから、なんだかうれしいな。ひざをすりながらゴシくんにちかづくと、ゴシくんの顔が少し

ずつ大きくみえてくる。ひょっとゴシくんの顔をかんをつこしてみる、いつもどおりのゴシくんの顔だ。ゴシくんもあたしの顔をみてる、ゴシくんはあたしがどうみえているかな。

きっとかわいくみてるよな、こつもあたしの「とかわいい」といっててくれるもんね。いくよつていつて、ゴシくんの顔をもう一回みる。つかつて息をふいたら、あたしのくちびるとゴシくんのくちびるがチョットくつぶ。あたしのグレープのくちびるとゴシくんのくちびるが。びつもじよじよせ、また会こましたね、つて。5秒くらいで、あたしのくちびるとゴシくんのくちびるがはなれる。せつかく、じんこちはしたのこ、すぐやよ

うなり。じめんね、でもまた会えるから、がっかりしないで。

「・・・グレープ・・・」

ゴシくんがあたしの口紅をあてる、正解。いつもあたしがしてるから、もうチョつて

しただけで味がわかつちゃうみたい。きっと、あたしのグレープが

「ゴシくんこもりつって
るんだね。あたしのすきなグレープの味が、ゴシくんこもりつて
んだね。」

「たしか、ゴシくんもグレープすきだつたよね
「うそ、つてゴシくんがうなづく。あたしもすきだよ、グレープも、
ゴシくんも。てんび
んにかけたら、もちろんゴシくんの方がおもこなさ。ゴシくんはお
おきいんだよ、あたし
の中でものすき『じくおおせ』なんだよ。ゴシくんがいてくれるだけで
元氣もうるし、ゴシ
くんとおしゃべつしてただけで樂しくなれるんだよ。おじいちゃん
おかあさんとおんなじ
ぐらご、おおきいんだからね。」

今日は、おかあさんとこっしょに病院にこつてきた。おかあさん
に手をひかれて、こつ
ちよつていつもとおんなじ道をあるいた。受付のおねえさんとおは
なしして、待合席であ
たしのなまえがよばれるまでまつてゐる。たいくつ、たいくつ、た
いくつだ。病院にく
るたんび、30分くらこまつんだよ。じゃあ、30分くらこどこか
であそぼうつて言つて
も、おかあさんにだめつていわれる。つまんないつてわかつてゐ
るのに、まつなんてイヤ。
ハズレつてわかつてゐるクジをひいたり、負けるつてわかつてゐるゲー
ムをしたり、マズイつ
てわかつてゐるもの食べるのとおんなじだよ。そんな時間をふんわ
かしたイスにすわつて、
ずっとまつてなきやなんない。足をぶらんぶらんしてたらおかあさ
んにおこられるし、テ
レビをみててもニコースしかやつてないし、アニメがみたいなんて
いえないし、いつも
チャンネルかわんないし、携帯用のゲームは目がわるくなるからつ
て買つてくれないし、
家にあるマンガや本だつてもひみあきてるし、つまんないよ。そ
れに、病院の空氣つて
きらい。だつて、ほとんどの人が病氣だからきたないもん。あたし
の右つこにすわつてゐ
人も、左つこにすわつてゐる人も病氣なんだよ。うつたらどうして
くれるの、とぼちり

もいにとこだよ。こんなバイキンマンがうじゅうじゅ、あたしの回りをとんでも。ねねがいだから、あたしの中にはまこつてこないでね。あたしが病氣になつたら、ゴッくんとチコウできないんだから。せついたら、責任とつてもいいつよ。とれないんなら、私にスッつてうつせないでよ。

まだですか、あたしのなまえ忘れてませんか? たいへつ、たいへつ、たいへつ、たいへつだよ。あたしは検査できてるだけなんだよ、パツつておわらせたい。こんな不健康なひとたちにはさまれてるの、きりこ、れりこ、きりこ。でも、それを口でできなあたし。おかるさんには迷惑かける、おかあさんにはいりれる、だからいえないあたし。よわむしにむし、あたしつたら。自分にツン、ふてくられる。ゴッくんがいてくれたらなあ、いつもそうめぐる。ゴッくんとおはなししてたら、30分なんてあつとこつまだよ。えつ、もう終わっちゃつたの。なんなら、もつとまつててもいいのに、つてくらう。それならゴッくんよべばいいのに、つて?ダメ、ゴッくんはあたしだけのものじゃないんだから。あたしのわが今までふりまわしてばっかりじやいけないの。ホントはせつしたいよ、でもがまんもしなきやいけない。あたしがだだこねてばっかで、ゴッくんにきりわれたらかなしいもん。

あたしのなまえが呼ばれた、きょうは35分まつたよ。5分オー

バー、そのかわり次は
25分にしてね。ミリカせんせい、じんじゅぎせ。ミリカせんせい、じ
んこちは。1ヶ月ぶり
のせんせい、あたしの検査が月に1回だから。ミリカせんせいにはお
かあさんより年上、お
ばあちゃんより年下。せんせいのまわりはポワポワして、とつて
もやわしい気がてる。
だからせんせいはすき、おもしろくない検査がちよつぴりおもしろ
くなる。
「なにか、様子のかわったところはありますか?」
「いいえ、ありません。」
「外に出すぎたりしてませんか?」
「いいえ、おうちの中ばっかでたいくつです。
いつもとおんなじ質問されて、いつもとおんなじ答えをこつ。い
つもとおんなじ検査を
して、いつもとおんなじ結果がでる。今までどおり生活してねば
だいじょうぶ、だつて。
「無理はしないで、ゆっくりすこしおこ」
「ミリカせんせいにいわれたから、ハイつていつた。きょうの検査
はこれでおしまい、ま
た来月までさようなら。おかあさんに手をひかれて、2時間前とお
んなじ道をあるいてか
えった。途中でおかあさんがアイスをかつてくれた、おいしきな

きょうは幼稚園にいった、あたしもきょうから年長さん。年長さんってことは、年中やんや年少さんからしたらおねえさん? あたしがおねえさん、へんなの。なんだかくすぐつたい、タンポポの綿毛で顔をこちよこちよされてるみたい。そんなことはなしながら、バスで幼稚園までつれてつてもらった。

年長さんになつたつて、やるひとはあんまりちがわない。そういうつたら、ゴッくんもウンつていつた。そうだよね、急におねえさんになるわけじゃないもんね。特に、あたしは。

あたしはまだおねえさんになれない、誰かがいないとダメだから。幼稚園にくるときは、あたしのとなりにはいつもゴッくんがいてくれる。ちがつた、ゴッくんのとなりにいつもあたしがいるんだ。誰かがいてくんないといけないから、ゴッくんのそばにピッタリいるの。ぜつたいに他の子ことられなことにするの。

他の女の子がゴッくんと遊びたいて、あたしにいつてきた。あたしは、ダメつていつた。なんでダメなのつてきかれたから、ダメだからダメなのつていつた。そしたら、その子があたしの背中を2回なぐつた。バン、バン、つて良い音がなつた。痛いよー、でもこれでコツくんをとられなくてすむならがまんするよ。痛いの痛いの

とんどけ～つ、やつぱ

痛い。。

トイレごへつてコツくそこへつて、トイレごへつた。かえつてきたら、ゴツくんがいなかつた。ビーハ、ビーハ、かくれんぼじやないよね。後ろからそつと来て、あたしをビツクリをせるんじやないよね。右みて、左みて、前みて、後ろみて。「・・・いたつ！・・・」

でも、なんで？

なんで、やつきの女の子と遊んでるの？

せんせいにきいたら、あたしが注意された。あたしがいつもゴツくんとこるから、他の子がゴツくんと遊べない、つて。あたしもゴツくんだけじやなくて、他の子と遊びなさい、つて。なんで、なんで、あたしがおこられるの？あの女の子がゴツくんを横取りしたんだよ、あたしはわるくない。なんで、なんで、なんで、ゴツくんはあの女の子のところへいったの？

ゴツくんが他の女の子と遊んでる、おえかきしてわらひてる。ゴツくんがたのしゃうなのが、あたしさをみし。今まで、ゴツくんがたのしゃうなのは、あたしもたのしかつたのに。さみしい、さみしこ、さみし。体の中がキュつてしまい、ボタンがポチつておされた。涙がポツンつてさみしく出でたから、あたしはグスンつてすすつた。涙がとまらないで出でてきたから、あたしはソーンツてなきまくった。

ひとつ涙がひとつのおもしり、とまらない涙はとまらないこむし

る。体中がさみしくなつて、いくらでもあたしの外に出でこつた。ホンホンないでたから、クラスの中のみんながこつちをみてた。せんせーが「ミサカミサカミサカちゃん」つてだきしめてくれてたけど、関係ないの。あたしはコツくんがいなくてないでるの、関係あるのはコツくんなの。そのままコソコソうずくまつてなにしてたら、あたしのすきな声がひびいた。

「ミーちゃん・・・ミーちゃん・・・」

コツくんの声がした。あたしを呼んでくれてる、あたしのために言葉をいつてくれてる。

あたしのところに来ててくれた、他の女の子のところから来ててくれた。ありがと、コツくん。体の中のさみしさをさがす田中かひ、わづらつとまつて。

「だいじょうぶ、ミーちゃん？」

あたしが泣きおわつたら、コツくんが心配してくれた。だいじょうぶつて答えたら、よかつたつて言つてくれた。

「ミーちゃん、じめんね」

コツくんがあたしにあやまつた、他の女の子のところにまつて、めんねつて。ううん、つてあたしは首を何度もふつた。

「コツくん、じめんね」

あたしもコツくんにあやまつた、こんなことで泣こじげじめんねつて。あたしのせいだ、コツくんの自由がなくなつちゃつてるんだよね。かじにわかつてるの、わかつててコツくんのとなりにいるの。ホントにじめんね、あたしこそはコツくんがひつみうなの。あたしの

となりにゴックくんがいて、ゴックくんのとなりにあたしがいたことダメなの。ごめんね、いい
つかれめんね。

きょうは幼稚園でプール遊びの日、おつきなペーパーポールプールにみんなでいる。バッシュ、バシャバシャ、ピッシャー。わわやかな音がなる、みんな気持ちよさそう。ぞんねんながら、あたしはあの輪つかの中にはいることできません。病院のミリカせんせーにダメっていわれてるから。みんなが水着でつめたさとたわむれるあいだ、あたしは校庭のベンチで麦わらぼうしと皿にワンピースで見学。みんながつめたくなってるのを見るのも涼しかつたけど、じつかむなし。なんで、あたしはあそこに入っちゃいけないの？

病気はあたしのせいじゃないんでしょ、だつたら少しへりこみるしてよ。ツンとしてたら、せんせいがいろいろやさしく話しかけてくれた。「ミサ」ちゃんは「ミサ」のことが好きなの?」「うん、大好き」

「いいなあ、先生もミくんが好きだよ」

「ダメだよ、コツくんをとつたら」

「大丈夫、ミサ」ちゃんのものだもんね」

あたしもせんせいも二人でわらつた。せんせいは毎年あたしがプールにはこらないから、あたしの横にいてくれる。せんせいも「みんなさー、あたしのとばつちりで。せんせーいだつてつめたくなりたいの」。

じばらべしたら、コツくんがこいつあわててくれた。あたしがつま

んなくてふてくされ

ないかと思つて。そしたら、せんせいがゴッくんにきこった。

「ゴッくんはミカロウヤこのことが好きなの？」

ゴッくんはあよつとおどりこた顔して、あたしをすりし見た。あたしは答えが気になつ

てゴッくんをジッとみてたら、ゴッくんは横をむいて「クンヒツ」
なずいた。

「じゃあ、2人は両想いだね~」

せんせいの言葉に、あたしははずかしくなつた。うれしくて、うれしくて、はずかしくなつた。ゴッくんはなにも言わないで、プールのぼりに走つていいく。わかつてゐよ、ゴッくん。ゴッくんはあたしよりも恥ずかしがりやせんだから、にげちやつたんだしょ。

その日、幼稚園からかえつたらゴッくんがあたしの家にきてくれた。おととい来てくれたから、2日ぶりだね。ベッドにすわつたあたしとカーペットにすわつたゴッくんはきようもおしゃべり。たのしこな、ゴッくんとのおしゃべり。何のおしゃべりかはどうでもいいの、誰とおしゃべりするか、それだけだから。ゴッくんとおしゃべりしてることが大事なの、あたしにとつて。

「ねえ、ゴッくん

「なあに?」

きょう気になつたことがあつたの、だから聞いてもいい?

「ゴッくんつて・・・ホントにあたしのことが好き?」

あたしみたいな、わがままな女の子でいいの?

「うん、そうだよ」

あたしの皿を見て眞っ赤てくれた、やっぱ幼稚園のときは恥ずかしかったんだね。せんせいやがあたしのとなりにいたから、眞っ赤らかったんだね。うれしいよ、あたしの体には入りきれないくらいこわしじよ。「うれしじ」があたしの中でたべるたぐさんうじこじるよ。

コラくんはあたしがすきなんだね、Hくく。

「あたしもコラくんのことが大好きだよ」

あたしもすきつて言つちやつた。コラくんだけ眞っ白いひくいかなつて思つて、あたしも言つた。あたしの顔が二口二口こじる、コラくんの顔はあんまりかわらない。ガムンしてゐる、コラくん? 顔が恥ずかしくなるのが恥ずかしくて、やせガマンしてゐるんだね。

そんなところも、かわいくてすきだよ。せつと、あたしのすきが大きくてくすぐつたくなつちやうんだよね。あたしがじかじかにするから、コラくんはもぐもぐしちゃう。

コラくんが帰るつてこつた、時計をみたらもう壁をあわせた。そうか、6時半からコラくんのすきなアニメがやるんだよね。お家に帰してあげなこと、コラくんをコラくんの時間にもどしてあげなこと。机のむねを引き出しあげて、どれにしようかなつてえらんだ。ストロベリー、わよつの味分で。あまくて、みずみずしくて、あかい。ストロベリーの口紅をくちびるに一周をわる、あたしのくちびるがストロベリーになる。イチゴの赤とくちびるの赤がたしれんで、もつとあかくなつた。ふつつのおか

あさんの使つてる口紅

をぬつたみたい。すこし大人になつたみたい、ウフフ。

ひざをすりながらコツくんにちかづくと、フウって息をする。いくよつて言つて、コツ

くんのくちびるにあたしのくちびるをくつつけた。コツくんすきだよ、チユツ。あたしのストロベリーのくちびるとコツくんのふつつのくちびるがピッタんコ。あたしの大人みた

いなくちびるとコツくんの幼稚園のくちびる。コツくんが好きなあたしのくちびるとあた

しが好きなコツくんのくちびる。またあいましたね、2日ぶりですね、つていつてる。あ

たしのくちびるがコツくんのくちびるにいつてる。5秒くらいでくちびるがなれたら、

下をむいた。コツくんに好きつていつてもうつた後のチユウは、うれしくて、はずかしかつた。コツくんはあたしを元氣にしてくれる、何倍にも、何十倍にもしてくれる。

やまはコツくんとおでかけ、あたしの夏休みのおもいでになる日。おやらせんにはお田さまで、クヌギの木にはカブトムシがいて、あたしのとなりにはコツくんがいる、

やつたつ。

「ミーちゃん、あつくない？」

「うん、だいじょうぶ」

コツくんが何十回もきいてくれた、心配してくれてありがと。確かにあついのはあつ

いんだけど、それは夏だからじょうがないの。お家にいたつてあついし、はだかになつたつてあついんだから。それにきよは雲がでてるから、いつもより平気だよ。そのおかげで、こいつやってコツくんとでかけられるんだから。

病院のミコカせんせいから、ピーカンな日はなるべく外にいかないでつていわれてるから、

せつかくの夏休みでもあたしはお家にいないとこない。みんなプールにいつたり、

スポーツをしたり、追いかけっこしたり、すつじくたのしそうなのにおたしにはそれが禁

止されてる。雨の日になつても、外にでてもプールもスポーツも追いかけっこもできな。だから、あたしが外に出れるのはいつこいつ雲のこゑぐらい。そんなのちよびつ

としかないから、あたしの夏休みは何日間かだけ。「つまんな~い！」つて、大声あげたい

けど言つてもなにもかわらないし。たいいくつ、たいいくつ、たいいくつ
ざう。そのかつり、き

よつねは特別たのしんでやるんだから。1ヶ月半の夏休みを何日間で全部たのしんでやる。

あたしとゴジくんのだいぼうけん、しあわせぱーつ。

田んぼの地やおれをトゲトゲぬくべ、さあへるの川をかこへ

卷之三

草野の御心懇。田川

でせむじこちせんせおはあひせんがお米をそだててゐる。」ふたりとも

そろいですね。土と草

「二ちゃん、氣をつけてね」

やうこつて、田んぼの中のせつそい道をしたがうてあるべく。

たしもすべらなこなう

入ったらえらいこつち

や。白いワンピースがベチャベチャになって、麦わらぼうしが茶色くなつて、コツくんにめいわくかけて、コツくんに嫌われちゃうかもしれない。そんなのヤダ、あたしこうばな

い。なんとか歩き出たが、前におこなおこな木がある。下を向いてほつそい

うから何本にもわかつてた。アニメで妖怪が再生するみたく、によきによきつて生えてひ

ろがつてた。

「すつごい、すつじい大きいよ、ゴッくん」
あたしはゴッくんのシャツの袖をつかんで、いっしょうかんめい
言つた。

「すじいでしょ、これクスノキつていうんだ」

クスノキ、それがあなたのなまえですか。どうせじんじんは、ク
スノキさん。あたし、
ミサ「つていいます、よろしく。

クスノキさんはあたしとゴッくんが何人でもはいつちやうへりう
おおきかつた。あたし
とゴッくんがよりかかると、2人を陰でつつんでくれた。とっても
すずしかつた、きもち

よかつた。あたしを歓迎してくれてるのね、クスノキさん。
「すずしいね、ゴッくん」

「じいなら、ミーちゃんもずっといられるかなつて思つて
やうなんだ、あたしのじとを考えてここに連れてきてくれたんだ。
やさしいね、ありが
とね。あたし、じい氣に入つたよ。すずしいし、風につつんでもう
つてるみたいだし、と
なりにゴッくんもいる。

そのまま、きょうはクスノキさんの下でゴッくんとすうとおじや
べりした。クスノキせ
んは下からみあげてもとにかく大きかつた。田んぼではたらくおじ
いちゃんとおばあちゃん
んが小さくみえてかわいかつた。遠くにみえる山は縁がたつくせん
で、それがお日様の光
にあたつてキレイだつた。クスノキさんによりいかかつておしゃべり
してあたしたちもか
わいかつた、はず。

「ありがとう、コックくん」
帰り道できょうのお礼をした、クスノキさんのどりに連れてつ
てくれてありがとう。
どういたしまして、ってコックくんはいった。おやぢさんには昨日が
うかんでた、オレンジ
色でキレイだつた。

あたしは小学生になつた、黄色いぼうしと赤いワンドセルがあたらしいアイテムになつた。なんだか探検にいくみたい、ワクワク。コツくんと毎日こつしょに学校について、なるべくいつも学校からかえつた。でも悲しいよ、コツくんとクラスがはなればなれになつちやつたから。幼稚園のときは、いつでもとなりにいたのに。おかあさんについて、それはいつまでもコツくんのとなりにぼうかいちゃいけないってことなのよつて言われた。あたしもちょっと大人にならないといけないんだつて、そう言われた。わかりました、コツくんにあいたいけどガマンします。ただ、コツくんと遠くになりたくない、近くでいたい。だからね、これだけは言わせて。

「コツくん、すきだよ」

いつぱい気持ちをこめて囁うと、コツくんはウンつとうなずいてくれる。コツくんといつしょにいれる時間はへるけど、いつもコツくんの中にあたしがいてほしい。コツくん、すきだよ。

最初のころは、あたしはコツくんとはなれてるのをガマンするのがつらかった。コツくんはかつこいいし、やさしこし、かけっこも速いし、勉強はまあまあ。そんなコツくんは

女の子に人気があった、それがあたしの痛みのタネ。その中には、

多分あたしよりかわい

い子やきれいな子もいるはず。コツくんがあたしから他の女の子に心がかわらないかつて

思つと体の中がキツくなる。あたしの近くにいて、あたしからはなれないで。あたしの、

ミサコのとなりにはいつもコツくんがいるからね。

バレンタインデーの田には、コツくんは8コもチョコをもらつた。コツくんは隠して

るつもりだつたけど、コツくんの黒いランダセルはパンパンにふくれてた。ちょっと切なかつたけれど、ガマン、ガマン。他の女の子たちこまけないくらい、あたしはコツくんがすきなんだから。

きょうはあたしが呼んでたから、コツくんがあたしの家にきてくれた。そこで、ベッドにすわつてゐあたしがカーペットにすわつてゐるコツくんにチョコをあげた。

「ハイ、どうぞっ」

おかあさんに手伝つてもらつて、いつしょつけんめに作つたよ。

・・ごめん、ホントは

ほとんどおかあさんが作つたんだけど。でも、あたしのすきがいっぽいはいつてゐから。

「食べてもいい？」

コツくんがいつた、あたしはつれしかつた。あたしのチョコだけ

は田の前でたべてくれ

るんだね。もしかして、あたしは他のチョコをくれた女の子たちとはちがう「特別」なの?

やつたつ、あたしはコツくんのとべべつ。

「おいしこよ」

ありがと、でもおいしかったのはホントは彼らがでもここ。
おいしかったかは、
おかあさんのお手柄だから。その中にはこうして、あたしの気持ち
がコツくんの中にはこ
つてくれるかな。

その日のチョウははじめての味だった、いつもフルーツじゃない
チョコレートの味。
2人であたしのチョコを食べて、そのまま2つのくちびるがくつ
いた。チョコの口紅が
ついたあたしのくちびるとチョコの口紅がついたコツくんのくちび
る。チョコレートの味
が口いっぱいにひろがった、あまくて少しにがかった。

あたしはいつのまにか、コッシくんのいないクラスに慣れた。もちろん、コッシくんがいなのはやみしいけれど。こっぱに友達できたし、みんなでキャッキャはしゃごどるのは楽しかった。

コッシくんもおんなんじ、こっぱに友達ができるワワはしゃいでた。あたしとコッシくんがちがうのは、コッシくんはみんなと校庭で走り回れるけど、あたしはそんなコッシくんを教室とか遠くからみてる」としかできなこと。夏とかお田様がつく光つてるとときは外に出れないから教室にいるし、冬とかお田様がよわってるとかも動き回れないから校庭のはしつこの方にいるくらい。いいなあ、みんながつりやまっこ。あたしも力いっぱいにこの大きな校庭で走ってみたい。でもやんなこ、おとづれさんやおかあさんやせんせいやみんなやコッシくんに迷惑かけるから。でもねえコッシくん、あたしのお願いってそんなにいけないことなのかな? そんなにあたしが苦じへならなこといけないくらい、いけないことなのかな?

体育の授業ではあたしはいつも見学、校庭のすみつ上でポツンとすわってるだけ。つまんないし、やみしいし、やるせない。みんながドッジボールしている

のや、サッカーしてる

のをみてるだけ。あたしが休むせいで、30人のクラスが29人に
なっちゃう。だから、

ドッジボールやサッカーをするとき、チーム分けがしにくくなる。

2チームにしても、3

チームにしても、4チームにしても、半端になっちゃう。『ごめんね、
あたしのせいだ。あ
たしが元気でピンピンなら、へんてこなチームにならなくていいの
にね。

きょうは寒いけど陽がでてるから、麦わらぼうしを装着。みんな
の赤白ぼうしとはちが
う、あたしだけのけ者みたい。あたしだけ体操着じゃないし、あた
しだけ運動してない。

夏なんかもつとちがう、日傘をさして見学しないといけない。みん
なとあまりにもちがう、

あたしだけとくべつ。特別つて、いいこと、わるいこと、どっち？

せんせいは気をつかつて、毎回けんがくしなくてもいいって言つ
てくれる。教室にいて
もいいし、図書室にいてもいいし、保健室にいてもいいって言つて
くれる。あたしはそれ

をダメつていう、せめてみんなが体育をしてる場所にいたい。そこ
にいないと、ホントに
のけ者にされてる気になつてきそうだから。

ちょっと無理もしたりした、ガマンをこえたりした。夏のカンカ

ンした太陽の光がすご

くて、焼けそうにあつい日だった。どうしようか迷つたけど、あた
しは日傘をさして麦わ
らぼうしをかぶつて見学した。痛いくらい太陽はひかつて、眩しい
くらい太陽はかがやい

てる。あたしの体があつくなつて、れむくなつた。だんだん田の前
がボヤーンつしてしてき
て、コテンつて横になつた。誰かの声がきこえたけど誰の声かわ
らなかつた。

『気がついたら、あたしは保健室にいた。せんせいがあたしをいこ
まで運んでくれたみた
い。安静にしてなさいって保健室のせんせいにいわれて、ベッドで
横になつてたら6時間
目があわつた、チャームがキーンゴーンカーンゴーンつてなつてた。
外がうるさくなつて
くる、みんなが下校したり、校庭であそんだりしてゐから。あたし
もかえりたい、たのし
くかえりたい。コツくん・・・コツくん・・・。
「・・・ミーちゃん・・・」

田をあけたらコツくんがいた、ちよつとおどりいた。

「ミーちゃん、だいじょうぶ?」

きょうは・・・だいじょうぶじゃない。

「コツくん、なんでここがわかつたの?」

あたしの友達があしえてくれた、つてコツくんはいつた。あたし
が体育の時間に保健室

にいつたつて聞いて、コツくんはきてくれた。ありがとう、コツく
ん。

コツくんはあたしに元氣ができるまで、日差しがおさまる夕方まで
まつてくれた。コツく
んといふとパワーをもらふる、それは今もかわらない。帰り道でコ
ツくんが手をつけないで
くれた、あつたかかつた。あたしがまだ気分がよくなかったから、
ずっと元気をくれてた。

もう学校の子はみんなかえつてたから、恥ずかしくなかつたみたい。

「ありがとう、コツくん」

あたしは弱つてたから泣きやがつた、ゴッくんのやせじやい。
ゴッくん、あたし嘘
ついたかもしない。ゴッくんのいなイクラスに慣れたなんていつ
たけど、あたしにはや
つぱりゴッくんがいてくれないとダメみたいだよ。

次の日、学校を早退して病院にいった。検査の日じゃなかつたけど、いちおつりておかあさんに言われて。また30分まつのはわかつてたから、図書室で本をかりておいた。「つまんない」のみなさん、きょうは相手してあげられないよ。30分はすぐおわつた、あたしの名前はいつもよつ早くよばれた。ミツカせんせい、こんにちは。ミサワちゃん、こんにちは。みつけたよ。きょうひまつこミツカせんせいこしつもんされて、いつもの検査をした。けつかは異常なし、よかつた。ただ、あんまり無理しないようになつてミリカせんせいに注意された、すいません。

お家でベッドに横になつてたら、サッチがきてくれた。早退して出られなかつた授業のことを教えてくれた、ありがとう。サッチはおんなんじクラスで、家も10分くらいしかはなれてないの。だから、なかよしになつた。コッくんこきのう、あたしのことをおしえたのもサッチだつた、またありがとう。サッチとおしゃべりしてたら、コッくんがきた。サッチとコッくんはお知り合いだから、こんなにちはつて言いあつた。ホントは、お知り合になつたのはきのうなんだけだ。あたしがよくコッくんの話をしてたから、サッチは昨日わざわざお知り合いでないコッくん

のところにいつてくれたみたい。コツくんは、あたしにとって大事なひとつで知つてたから。

きょうは3人でおしゃべりした、なんだか変なかんじ。サツチはあたしの友達で、コツくんはあたしの好きなひと。だから、3人でおしゃべりしていると、コツくんに友達っぽくはなしたり、サツチに好きなひとっぽくはなしたりしゃべりうまい変えられるね、器用だね。それにくらべて、あたしは不器用さん。こんな不器用さんにつきあつてくれてありがと、コツくん、サツチ。

コツくんが帰るつていつたら、サツチがあたしもつていつた。人はいつしょに帰つてつた、さみしいな。2人がいなくなるのもさみしいし、コツくんとチュウできなかつたのもさみしい。3歳のときにしてから、あたしの家にコツくんがきたら必ずしてたのに。ああ、サツチをうらんでるわけじゃないよ、タイミングがわるかつたんだけだから。

そろかんがえてたら、おかあさんに呼ばれた。なんだろ?と思つたら、げんかんにコツくんがいた。コツくんはわすれものしたつて言つて、あたしの家にもどつてきたみたい。

「わすれものつてなあに?」

またあたしの部屋まできたら、コツくんは首をふつた。

「・・・してないでしょ?・・・」

あたしの机のおおきな引き出しを指でさしながらコツくんがいつた。あたしのフルーツ

の口紅がはいつてる引き出し。やあ、コツくんはあたしとショウするために戻ってきてくれたんだね。

「コツくん、ありがと」

あたしはいっぱい笑顔になつた、コツくんの気持ちがあつ、じつれしかつた。

「おばさんに嘘ついたけどね、わすれものつ」

そんないいんだよ、それはね優しい嘘つていうんだよ。コツくんのやわらかい気持ち

がね、嘘もやさしくしちゃうんだよ。

「コツくん、なにがすき?」

あたしの机のおおきな引き出しをあけてコツくんにきいた。あたしのぬる口紅をコツくんにえらんでもらうのは初めてだつた。コツくんがもどりにきてくれたのがうれしくて、

そうしたくなつた。

あたしはコツくんのえらんだグレープの口紅をくちびるに一周させる。チョコ「あ

るいてコツくんにちかづくと、いつもとちがつ感覺だつた。いつもはすわりながらのチョ

ウなのに、きょうは自然に2人ともたつてた。コツくんってこんなに大きくなつたんだ、

つておもつた。コツくんとの時間の長さをかんじた、コツくんがこんな大きくなるくらい

一緒にいるんだね、あたしたち。ちよつと背伸びして、あたしのグレープのくちびるをコ

ツくんのふつうのくちびるとくつつけた。2人とも成長してるのがわかると、なんだか背伸びしたのと同じ分だけ気持ちも背伸びしてるような気がした。コ

ツくん、これからもい

っしゃれてね。ゴックくん、これからもあたしと手を握ってね。

中学生になつたら、コッくんとおんなじクラスになつた。幼稚園からだから、7年ぶりにおんなじクラスだね。ずっとコッくんとおんなじところにられるよ、うれしいな。コッ

くんのことみてたら、顔がわらつてサッチにいわれた。

「コッくんといつしょだからって、にやけすぎ」

コッくん依存症、つてサッチにいわれた。そんなことないよ、前にくらべたら甘えなくなってきたのもん。おかあさんやサッチがそつやつて言つから、気をつけてるもん。

「中学のつりにせ、ミハコもコッくん立ちしないとね」

「・・コッくん立ちつて、巣立ちつてこと?」

やうよ、つてサッチがいつた。なによそれ、つてあたしはおもつた。

「親とか子とかならきくけど、コッくんから巣立つてどうひこつ」と?

「コッくんがいなきやダメ、つてふつにならなこようにあるひこ」とよ」

なんどよ、コッくんがいないとけなーのが何でダメなのよ。

「じゃあ、高校も、大学も、その先も、ずっとコッくんのところにいるの?」

「それは・・・」

言ひ返したいけど、何もいえなかつた。いままで先のことを考えたりしてなかつたから。

ずっとコッくんといたいとは思つてゐけど、くわしく考えたりしたことがなかつた。

「ミサ「せやれがいいかもしけないけど、ゴッくんはわからないでしょ？」

カツチの言つてることはもつともだつた。人間は大きくなつてくうちにたくさんの出会いや別れをくりかえしていく。たくさんの恋をして、おなじだけの失恋がマイナスいくつかの失恋をする。あたしのもつて、そのたくさんの恋は全部ゴッくんにあげてもいい。でも、ゴッくんのもつて、そのたくさんの恋をあたしが全部つばつちやうの？そんな権利があたしにはあるの？こんなにわがままなあたし！」

ゴッくんは中学生になつて、身長がぐんとのびて大人っぽくなつた。あたしは中学生になつても、身長もあんまりのびないし大人っぽくならなかつた。そんなのイヤ、あたしもゴッくんとおなじに成長がしたい。

ゴッくんのとなりにいれるようになりたいよ。これじゃ、おにいちゃんといもうとみたいじゃん。あたしとゴッくんはベストカップルがいい、そうしないと不安になる。ゴッくんがそのうち、あたしにバイバイって言つたやうんじゃないかつて。「どうしたの、ミーちゃん？」

ゴッくんの言葉に、あたしは正気にかえつた。

「ううん、なんでもない」

あたしは笑つて、そういつた。きょうはゴッくんがあたしのお家にきてくれた、4日ぶりだね。中学生になつてから、ゴッくんがあたしの家にくるのは1週間に2回になつた。

これまで1週間に5回ぐらいだつたのに、さみしこよ。ゴッくん

も部活があるからしょ

うがない、あたしはわがままなんか言つちゃいけない。コツくん立ちはできないけど、ガマンくらいしないとね。

「水泳、
たのしい？」

ゴックくんは水泳部にはいった、あたしは図書部で、サッチは吹奏楽部。運動をする部活にははいれなかつたから、あたしは図書部をえらんだ。図書室は静かできだし、本もよめるし。

「泳ぐのはたのしいよ、まだ1年だから雑用がおおいけど、
どうか、運動部はたいへんだね。図書部なんて地味なところじゃ、
そんなに先輩とか後輩とかないからね。

「今度、れんしゅう見に行くね」
ヨツくんがウンってうなずいた、夕日をかぶつてあつたかい顔になつてた。

きょうはパインのチュウをした、4歳ぐらいから何百回としても味のチュウ。コシく
んが帰ったあと、あたしはこうかいの気持ちになつた。あたしのす
きつて重くないかな、
つてユツくんに聞こうとしてたから。なのに、怖がりのあたしはき
けなかつた。ウンつて

言わねたりひつじめのひと思つたら、聞くのをあきらめてた。

ひとしも夏がきました。みんなが待つてて、あたしが待つてない
夏。あたしの天敵、夏
なんてキライ、キライ、キライ。お昼に外に出るのはつらこし、病
院のミリカせんせいに
も氣をつけるように言われてる。あたしも少しずつ成長してきて、
暑さにも敏感になって
きてるから。年をとる」とに病気とも向き合っていかないといけな
いっていつ、ミリカせ
んせい談。

学校までの登校は朝はやいし、家までの下校は夕方だからいけど、体育の見学では麦わらぼうしつて合わないからいや。キャップのぼうが合いそうだけど、背に腹はかえられない。格好がどひじうより、暑さをふせぐことのほうが先決。

きょううの見学はたのしみ、水泳部のれんしゅうの見学だから。きょううは図書部の当番の田じゅなかつたから、プールの外から見学ティー。あたしがコツくんをみると、コツくんがあたしにきづいた。あたしが笑顔で手をふつたら、コツくんもふりかえしてくれた。コツくんの水着姿はりりしい、ほんのり日焼けしてて格好いい。コツくんの泳いでの姿はまぶしい、水しぶきをあげて格好いい。

中学生になつてもゴッくんをすきな女の子は何人かいたけど、あたしは負けない。あたしが一番ゴッくんのことをじつじて、あたしが一番ゴッくんの近くにいるんだから。

「ミサ「ミサそれがいいかもしれないけど、ゴッくんはわからないでしょ?」

サッチの言葉が急にうかんだ、前にサッチがあたしにじつた言葉。ゴッくんはたくさんこの恋をもつてゐる、確かにそうだ。あたしがいなかつたら、ゴッくんはいろんな人と恋をしているにちがいない。じゃあ、やつぱりあたしがゴッくんの恋をいくつも取つてゐるのかな。

ずっとゴッくんといいたいあたしは、ゴッくんの恋を全部とひりつてゐつてことだもん。

ゴッくんにあきたい、あたしはあきたいへりじやないかな。ゴッくんにあきたい、あたしにじまつたりしてないかな。ゴッくんにあきたい、あたしをイヤになつたりしてないかな。あきたい、あけない、あきたい、あけない。びりじたらいの、あたし。あたしの体の中、パンパンになつて弾けあわやこそりだよ。ゴッくんの「」と考へてると、たまにあたしが壊れそうになつちやうよ。

ゴッくん・・・ゴッくん・・・。

田をあけたら保健室にこた、エフーンってイヤな暑さがした。田をあけたつてことは、今まで田をじじてたつてこと? なんで、あたし田をじじてたの? 「・・・ミサやん? ・・・」ゴッくんの声がした、周りを見たらとなりにゴッくんがいた。 「・・・ゴッくん、エフーンの? ・・・」

いいから寝てて、ってゴッくんにいわれた。あたしはゴッくんに言われたとおりに、保健室のベッドに横になった。

あたしは水泳部の見学をしてるとき、プールの外で貧血でたおれたみたい。ゴッくんがドサツって音にきづいて、あたしのいたところにあたしがいなかつたからプールの柵をのりこえて助けにきてくれたで、そのまま保健室まであたしをおんぶして運んでくれた。

「・・・・ありがとう・・・・」めんね・・・・

びっちを言つたほうがいいのか迷つたから、びっちはこつた。助けてくれてありがとう、

迷惑かけてごめんね。せつかく、ゴッくんのおつえんじよつと思つて行つたのに、ジャマしちやつたよ。あたしのバカ、バカ、バカ。

「ゴッくん、れんしゅうは？」

水着姿のまんまであたしを運んでくれたゴッくんがジャージ姿だつた。

「早退した、ミーちゃんが心配だつたから」

あたしのために早退してくれたの？でも、それって「あたしのため」じゃなくて、「あた

しのせい」なんだよね。あたしのせいで、ゴッくんが早退したんだ。

あたしがゴッくんのジャマばつかりしてる、あたしがいるから。あたしがゴッくんのとなりにいるから・・・。

あたしは保健室のベッドの上で涙をながした、くしゃくしゃ。びつしたの、つてゴッくんがいつてくれた。

「・・・・ごめんね、あたしのせいで・・・」

あたしの声がふるえてた、ヒクヒクいいながら泣いてた。

「ここんだよ、早退ぐらごワケはないんだから」

「そうじゃないの、あたしが泣いてるのよ。

「……あたしがいると、ゴシくんにたぐさを迷惑かかっちゃう……」

「……あたしがゴシくんをすきだと、ゴシくんのジャマイくなっちやう……」

「……あたしのすきがゴシくんをじめたりやう……」

今までいわなかつた気持ちをゴシくんにじついた。あたしがゴシくんのお荷物になつちやう

う不安、それでも離れられないもどかしさ。なきながら、ふるえながら、こわくなりながら、こわくなりながら、いった。

皿をぱりじぶりてたら、あたしに向かのつかった。かるくフワツつて、あたしのくちびるにのつかった。皿をあけてみたら、ゴシくんの顔がすくへ近くにある。あたしの皿のすぐそこにゴシくんの皿がある。あたしのくちびるがのつかった。あたしのふつうのくちびるとゴシくんのくちびるのふつうのくちびる。フルーツの口紅もぬつてない、ただのあたしのくちびる。はじめて、あたしの普通のくちびるくんの普通のくちびるが合わせつてた。味がなくて、へんな感じがした。いつもよつぱりヒーッチな感じがした。ふつのくちびるがせよなうすると、あたしがビックリで涙がとまつてた。

「ミーちゃん、だいじょ「ぶ？」

だいじょ「ぶつて」聞いたかつたけど言えなかつた、かわりにウン

つてうなずいた。はじ

めて、ゴックくんのほうからチューしてもらつた。うれしくて、はづかしくて、たまんなか

つた。体の中がドクンドクンなつてた、とまんないぐらー。これまでいっぱいチューして

きたのに、ものすごい緊張してる。あたし、こんなにこんなにゴックくんが好きなんだ。

「・・・ゴックくん・・・」

ゴックくんのとなりにいたいよ、ゴックくんを好きでいたい。

「・・・あたしのすき、重くない？・・・」

おもくないって言つて、おねがい。

「ううん、ミーちゃんのすき、うれしいよ」

ホントに？あたしに氣をつかつてるんじやなくて？

「・・・ゴックくんをすきな、他の女の子もいるよ・・・」

その子たちのほうがゴックくんは迷惑かからないんだよ。あたしみたく、お荷物になつた

りしないんだよ。

「特別なんだよ、ミーちゃんは」

「一番すきな特別な女の子なんだよ」

そういうて、ゴックくんがもう一回チューしてくれた。温かくて、苦くて、大人の味がするチュー。これまでで一番ながい、30秒のチューはあたしをあたらしい世界につれてつてくれた。あたしのくちびるがゴックくんのくちびるとぞよならしくない、つて。

2つのくちびるがはなれると、すくなく恥ずかしくなつた。体の中のドクンドクンがとま

んなくて、ホッペや耳が真つ赤になつた。ガマンできなくなつて、あたしは布団をガバッ

つてかぶる。ドクンドクンをおさえようと、胸のところをギュッ

ておさえる。ユツくん
が心配するといけないから、あたしは独り言をいつてた。「ありが
とう」「だいじょうぶ」「う
れしい」「って、ずっといつてた。

きょうはわたしのたんじょうび、14さいのたんじょうび。パンパカパーン、おめでとう。うれしいけど心配、あたしみたいな子供が14さいになつていのかなつて。コツく

「あたし、もう1回、13さいをしたほうがいいのかな？」

「いや、また2年生をやめへん」

つて、あたしだけ2年

あたしの体によれこせいのは
一歩ぐくま
生なんて たたでえ
でうばわれるなんて、
ぜつたにイヤだよ。

田ん中のあせみちをゴシ へんのいはなにこトハトハねへ。

暑いときには、田んぼの左側の道を歩いて、前と後ろにさくらんぼの木の下で草をうねりながら、ひたひたで草でできた道を歩く。暑いときには、田んぼの左側の道を歩いて、前と後ろにさくらんぼの木の下で草をうねりながら、ひたひたで草でできた道を歩く。

世汗かきながらはたらくてゐる おじしゃやんやおはあたやんもしな
い。おそらわんがくら

ヤツシャーいいながら歩

くと、コックくんが左にまがつた。

「……ちやん、氣をつけたね」

うん、だいじょうぶだよ。もつ何十回もあるいてるから、なれてるよ。なのにユツくん

はいつも氣をつけてつて言ひたへれる、やせじこな。ほつそい道をあるきると、田の前

におつきなおつきな木があつた。こんだけは・・・じゃないね。こんばんは、クスノキさ

ん。ミサゴだよ、またゴックくんといつしょにきたよ。

「いめんね、どこにもつれてつてあげられなくて」

いいんだよ、ゴックくん。あたしもゴックくんも部活だつたんだから、

その後から遠くに

くなんて無理だし。それに、あたしの体じゃあ遊園地とかにつれてつてもらつても、ほとんどの乗り物に乗れなくてせつなくなるから、せつかく来たのにて。だからいの、氣にしないで。あたし、ゴックくんといつしょならビックりつれしよ。

「すずしいね、ひんやりしてて氣持しげい」

クスノキさんはあたしとゴックくんがよいかかると、2人を陰でつんぐれた。あたしのたんじょうびをお祝いしてくれてるみたいに、クスノキさんの上のほうの枝がゴックサコッサれてた。あたしのためにダンスをしてくれてるの、クスノキさん？ ありがとう、とつてもうれしよ。

クスノキさんを通つてく風は、あたしの体をふんわり通つてつた。

1時間くらい、クスノキさんの下でゴックくんとずっとおしゃべりした。周りはまくらりだつたけど、となりにゴックくんがいるから安心だし、クスノキさんも守つてくれてるからもつと安心だった。

「キレイだね、ゴックくん」

おそらさんに、お星さんがたつて光つてゐる。ピカンピカン、

あたしたちを照らしてくれてる。お星さんたちも、あたしのたんじょうびをお祝いしてくれてるのかな。ありがと「う、ありがと「う、ありがと「う。

しばらく星をながめてたら、コッシくんによばれた。なあにって振り向いたら、急にひっぱられた。あたしの背中から、コッシくんが両手でグツつておしつなた。あたしの体とコッくんの体がくつつく、コッシくんにギュッつてだきしめもらつてた。あたしの体の中がドクンドクンいつて、はじめてコッシくんにギュッつてだれね。ドクンドクンがどんどん大きくなつてつて、すぐ恥ずかしかつた。あたしの体とコッシくんの体がくつついてるから、あたしのドキドキがすぐコッシくんにわかつちやう。はずかしい、はずかしい、はずかしい、はずかしいよ。でも、あたしは何もしないで、ずっとコッシくんにだきしめてもらつた。はずかしいけど、それよりもうれしかつたから。コッシくんのおおきな体ひつつまれてると、ほんわかする。いつもプールの外からみてる、水着姿のときのコッシくんのりりしい体。あたしのゆわつちい体にはない、あつたかさがある。

コッシくんはあたしをだきしめながら、あたしにチコウしてくれた。なんだか、あたしの中のぜんぶがコッシくんにうばわれちゃうみたい。そのまま、コッシくんとあたしがひとつになっちゃうみたい。素敵だね、あたしとコッシくんは2人でひとつなんだよ。2人じゃない

どちらがどうなつたの、こゝしうこなことひとつでなれないんだよ。

「ハーハヤン、すきだよ」

ゴックくんは、あたしに向回もチコカしてくれた。1回、1回、あたしの体の中はキュンつてしまんだ。ありがと、ゴックくん。あたしもゴックくんがだいすきだよ。これからもあたしのとなりにいて、ゴックくんのとなりにさせな。

きょうは検査の日、月に1回だけ病院にいく日。あたしのとなりにおかあさんはもうい
ない、もう一人で全部できるようになったから。1人で病院にい
るし、1人で受付の人
とおしゃべりできるし、1人で検査もうつれるし。もしかして、あ
たしもちょっと大人に
なったのかな、エヘヘ。待合室でも今までみたいにたいくつに過ご
したりしないの。学校
の宿題とか、試験勉強とか、中学生になるとたいへんなんだから。
30分なんてすぐだよ、

チチンパイپイって魔法かけたみたいにあつとこつま。
「ミリカせんせい、こんにちは。ミサコちゃん、こんにちは。いつ
もの挨拶をして、いつ
もの質問をうけて、いつもの検査をする。結果もいつもどおり、異
常なし。

「ミサコちゃんは、いつも健康だね」「
えつ、どこが？麦わらぼうしをかぶつたり、日傘をさしたりして、
時々たおれちやう子
のどこが。はてなマークだよ、ミリカせんせい。
「ミサコちゃんみたいな病気の人はね、みんな1回はおおきな症状
を起こすのよ」

おおきな症状、つて？

「小さい子つて無茶したりするでしょ、日光はダメつていつても海
にはいつたり」

そりや、あたしだつておんなじだよ。海にはいつて、バッシャン
バッシャンおもいつき

り泳いでみたい。飛行機にのって、おでりでるの近くで」ここにあります
つて言つてみたい。遊

園地にいって、コツくんと乗り物に乗つてたのしいゲートがしたい。
こうみえても、あた

しだつてたっくさんガマンしてるんだから。

「ミサコちゃんにはそれがないの、ミサコちゃんぐらいの年までに
はあるはずなのに」

それつて、あたしが優秀やさつてこと? あたし、みんなのお手本
になるような入つてこ

と? あたしもやればできるんだね、えつへん。

「ミサコちゃんには、なにか特別な予防線があるのかな?」

予防線、つて?

「いつも健康に気をつかつてる人が長生きできるとか、病気になら
ないとか」

そういう気がついが何かあるのかもね、つていわれた。あたしは
いろいろ考えたけど、

何もおもいつかなかつた。なんなんだろう、あたしの予防線つて。
あたしを優秀さんにつ

せてくれてる、予防線つて。

「でも、これから大きな症状が起るかもしねないから気をつけて
はおいてね」

はこ、ミコカせんせい。

あたしもめでたく、中学をやつせよ。そして、コツくんとおん
なじ高校にもこうかく。

あたし、よくがんばった。はくしゅ、パチパチパチ。

「3年間、またいつしょだね」

あたしが笑顔でいうと、コツくんが笑顔でウンツでいっててくれた。
「でも、きょうから3日もはなればなれだね」

あたしたちは、おんなじ新幹線にのつてた。おんなじ新幹線だけ
ど、行き先はべつべつ。

あたしは京都、コツくんは大阪。きょうはクラスのみんなで卒業旅
行、男の子は大阪、女

の子は京都にむかう途中。男女べつべつだから、あたしとコツくん
もべつべつ。京都と大
阪つてちかいけど、あたしたちにひとつは遠い。おとなつさんがあ
たしとコツくんにひとつ
て、京都と大阪はすつごじ遠距離。でも、3日ならガマんするよ。
あさつての夜には、ま
たおとなつさんだからね。

京都についたら、あたしは新幹線をおりた。コツくんは新幹線に
のつたまま、ピューッ
て向こいつのまうに走つていつた。コツくん、ちょっとだけさよなら。

京都はひとつてもキレイだつた、本で見るよつずつとキレイだつた。
すずしいけど、あつ
たかい。風がぴゅうぴゅうして涼しいのに、あたしの体の中はほん
のりしてゐる。コツくん
にもみせてあげたいな、写真なんかじゃなくていいよ。コツくん、

いつか2人でここに来
よつね。

「ほりつ、ボーッつとしない！」

ビクツつとして、ふりむいたらサツチがいた。

「なんだつ、おどかさないでよ」

体にわるいじやん、ただでさえあたしの体はよわっちいのに。

「今、コツくんのこと考えてたでしょ？」

「ドキッ、せいかい。

「コツくんといっしょに来たいつて考えてたでしょ？」

「ドキッ、ドキッ、またせいかい。サツチはするどい、だてに8年
も友達やつてない。

「いいじやん、来たいつて思つても」

「コツくんはあたしのすきな人だよ、問題ないでしょ。

「いいに決まつてるじやん、2人でまた来なよ」

「サツチのへんじ、なんだか意外だつた。コツくんにあまえるんじ
やない、とか言われる
のかとおもつた。

「なあに、その目は？」

「サツチがいつた、あたしが「なんだか意外」つて目をしてたから
だと思つう。

「さいきん、あんまり怒んないね、サツチ」

「あたしがコツくん、コツくん、つていつても。

「なんかね、あんたたちを見ててわかつたの」

「あんたたちつて、あたしとコツくん？」

「ミサコとコツくんはね、はなればなれにならない仲なんだなつて
やうだよ、あたしのとなりにはコツくんがいるし、コツくんのと
なりにはあたしがいる

「なんだよ。たぶん、この先も、ずつとずつと。

「だつたら言うことないでしょ、あたしがどういづ」

もうあきらめたから、つてサツチはわらつた。あたしもつられて

わらつた。

「それに、ミサコもだんだんガマンงりよくなつてきたしね」
コツくんのこと以外、つてサッチはまたわらつた。あたしもまた
つられてわらつた。

第1-3話（後書き）

次回が最終話になります。
この1-3話から繋がっていくストーリーの予定です。

いたい・・・いたいよ・・・。夜中にあたしの体が急にいたくなつた。体中がいたくて、息がしくくなつた。ガマンできなくてサッチをおこしたら、あたしはそのまま救急車ではこばれた。いつもどちらがう病院で、いつもどちらがう先生に、あたしの体をみてもらつた。

結果もいつもどちらがつた、異常あり。

あたしの体は不思議みたいで、せんせいもどにがどう悪いか分からぬみたいだつた。

突発性のなんとかつていわれたけど、ホントはせんせいも分からないみたい。どう悪いかわからぬから予防できない、経過をみたいて先生がいつた。それっぽい薬をのんで、

それっぽい検査をうけて、それっぽい点滴をして、あたしは病院のベッドにねかされた。

あたしは何もかわらなかつた、異常信号はつづりひきゅう。これがミリカせんせいが言つてたことなんだね、あたしみたいな病気の子は誰もが1回はおおきな症状をおこすつて。

「・・・ミサウ・・・ミサウも・・・」

サッチがないてた、あたしのとなりであたしの手をこじりつてくれてた。ごめんなさいサ

ッチ、あたしはダメな子だね。きのう、せつかくサッチがあたしをガマンづよくなつたつて言つてくれたのに、あたしはすぐガマンできなくなつちやつたよ。おこつてもいいよ、

これまでみたいに。

朝になつてもあたしはいたかつた、もつ何時間もあたしはいたいまま。先生がこまつてた、あたしの体が不思議ぢやんなせいで。じつじつこいか分からないから、あたしはそれっぽい薬をのんで、それっぽい検査をつけて、それっぽく点滴をして、ベッドにねていた。このままじや、あたしがこわれぢやう。ガタがきて、こわれて、うごかなくなつぢやう。

そんなのヤダ、あたしがなくなつぢやうなんて。まだ、あたしはやりたいことがたくさんあるんだよ。コッシュくんと高校生になつて、コッシュくんと京都にきて、その先も・・・。その先も、コッシュくんとずっとこいつにいたい、コッシュくんのとなりにいたい。コッシュくん・・・。コッシュくん・・・。

「ミーちゃん！」

コッシュくんの声がきこえた、目をあけたらコッシュくんがそこにはいた。なんで・・・大阪にいるんじゃないの？聞きたかつたけど、あたしは声がでなかつた。

「ミーちゃん、まけるな！」

ありがとう、コッシュくんがおひやんしてくれたら力ができるよ。がんばる、まけない、ぜつたい。コッシュくんとよつなりなんかしたくないもん。

「・・・ミーちゃん・・・」

あたしに向かががふんわりのつかつた。コッシュさんのへりびるがあたしのくちびるにのつかつてた。コッシュくんのふつつのへりびるがあたしのふつつのへりびる。こんなにちが、うつぶ

りですね。やこせん毎日あつてたのと、旅行してたから3日も1日ふさた。

コッシくんのくちびるは柔らかくて、あたしを安心させてくれた。なんだか体がかるくなつた、いたくなくなつた。息がしやすくなつて、体がおひつってきた。いたくなくなつた。息がしやすくなつて、体がおひつってきた。

先生がおどりいてた、

何がどうなつたのかわからないみたい。

「・・・ミーちゃん?・・・」

コッシくんもおどりいてた、じめんねビックリさせた。

「・・・コッシくん、ありがとう・・・」

今わかつたよ、あたしの予防線はコッシくんなんだね。コッシくんのとなりにいることだ、

コッシくんとチョウすることで、あたしはあたしでいられるんだよ。3日もはなればなれに

なつたから、あたしの予防線がパチンと切れちやつたんだよ。あたしにはコッシくんが必要

の、コッシくんがいてくれないとダメなの。だから、近くにいて。これからも、あたし

とずっといっしょにいて。はなれちやダメなんだからね、あたしがこわれちやうから。コ

シくんのとなりはあたしの指定席、誰にもすわらせない。そこが、あたしのこるべき場所だから。

第1-4話（後書き）

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。
前作「摩れた歯車」と対称的な物語を書こうと思いました。
幼なじみ2人のかわいらしい恋を書けたと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2129d/>

リップ・ケーション

2011年6月24日10時55分発行